

## 第31回高知女子大学看護学会報告

# ヘルスケアをデザインする —患者中心の看護を求めて—

山 田 覚\*

第31回高知女子大学看護学会が、去る平成17年7月23日(土)に、こうち男女共同参画センター・ソールで開催された。県内外の様々な施設から、173名の看護職の皆さまの参加があった。本年度のテーマは『ヘルスケアをデザインする～患者中心の看護を求めて～』で、ケアの主体者の立場から柳原和子氏(「がん患者学」著者)に、がんをきたご自身の体験から医療者への思いを熱く語って頂いた。また、岡谷恵子氏(日本看護協会専務理事)には、看護・医療専門職の立場から、看護職がいかに広い視野を持ち、実践活動をしていくかということをお話し頂いた。お二人の内容の濃いご講演を、参加者は時間を忘れるくらい熱心に聞き入り、日頃の実践を振り返って、看護者としてのあり方を再考する機会となった。その後会場を交えて、ディスカッションが活発に行われた。

### 学会長挨拶

松本女里 高知女子大学看護学会会長から開会が宣言された。(写真1)

高知女子大学看護学会の本年度と次年度(平成18年)のテーマ【ヘルスケアをデザインする】が企画された意図が説明された。講演会の講師である、ノンフィクション作家の柳原和子氏と、日本看護協会専務理事の岡谷恵子氏のご紹介があり、お二人の講師のそれぞれの視点からのご講演と、参加された皆さんとともに「患者中心の看護」の創造を目指し、考えていく機会にしたいとの挨拶があった。

### 来賓挨拶

来賓の挨拶として、高知県看護協会の中村ささみ会長よりお言葉を頂いた。(写真2)

また、高知女子大学学長の青山英康先生から、最近の高知女子大学の卒業生の動向、特に南裕子氏(11期生)の国際看護師協会(ICN/International Council of Nurses)



松本女里 高知女子大学看護学会会長 挨拶(写真1)



来賓挨拶: 中村ささみ 高知県看護協会会長(写真2)

\* 高知女子大学看護学会企画委員長

会長の就任、また、久常節子氏（14期生）の日本看護協会会長就任を例に挙げながら、高知女子大学看護学会に対する期待が述べられた。（写真3）

## 講演会

講演会は、午前の部、午後の部、そしてお二人の講師の先生を交えた全体討議により構成された。

### <午前の部>

講師：柳原 和子氏（『がん患者学』著者）

（写真4）

柳原和子氏は、ノンフィクション作家で、『告知されたその日からはじめる私のがん養生ごはん』（主婦と生活社）、『がん生還者たち 病から生まれ出づるもの』（中央公論新社）、などの著書があり、自らがお母様と同じがんを患った体験を克明に記し、同時に、末期・再発・進行がん長期生存者と現代日本のがん医療に警鐘をならす専門家にインタビューし、医療不信を文明・文化の問題としてとらえなおした『長期生存をとげた患者に学ぶがん患者学』（晶文社）が著名である。

講演会では、「彼方からの贈り物ーがんを生きて知ることー」を演題として、八年前のがん告知から、ご自身の体験をベースに、患者と家族の立場から医療や看護に対する思いをお話し頂いた。特に、十六歳の時にがんと診断され、手術を受けたお母様の四年間の闘病生活を例に、家族との関わりを語られた。また、医療の課題として、末期にいたるまでの医療者の姿勢が挙げられ、人のために何かをしてあげたいという志と良心で、日々の過酷な仕事を自ら支えている医療者としては、患者を、というよりも何もできない自分を凝視するのが辛いのではないかと、また、そうなるほどことごとくそうした患者を避けるようになり、これは必然なことであり、本来医療というのは治るための仕事なので、本質的に治らない患者を避ける習性がある、との指摘をされた。



来賓挨拶：青山 英康 高知女子大学学長（写真3）



柳原 和子 氏（写真4）

自然はやさしいが、一方では極めて厳しい摂理を崩さずに秩序をつくりあげており、生き延びるために日々、たゆまなく続いている抗争、死もまたその厳格な秩序を形成する偉大なる存在であることを実感し、そして今、生還したご自身の体験で講演を結ばれた。

### <午後の部>

講師：岡谷 恵子氏（日本看護協会専務理事）

（写真5）

岡谷恵子氏は、高知女子大学家政学部看護学科を卒業され、臨床を経験された後、看護基礎教育の教員、そして大学院での学びを経て、日本看護協会常任理事、2000年より現職に就かれている。これまで看護協会では、専門看護師・認定看護師制度を確立するとともに、医療政策、健康政策、看護政策に関して



岡谷 恵子 氏 (写真5)

専門職能団体として、患者や利用者中心のサービス提供体制を構築するために、様々な政策提言とその実現のための活動をして来られた。現在は、中央社会医療協議会の専門委員として、日本の医療提供体制の改革に取り組んでいる。

講演会では、『『看護』を社会の価値にするために』を演題として、先ず少子高齢化の進展、医療技術の進歩、介護保険制度の創設、国民の健康や医療への意識の変化等により、患者や国民の意思決定を尊重した、保健・医療・福祉の統合的なサービス提供を主体とするより質の高い、効率的な保健医療福祉サービスを提供するための改革に関する、現状の紹介があった。「2000年版WHO世界保健報告」によると、保健医療制度を医療の質や平等性という観点から総合的に評価した結果、日本は191か国中1位であり、医療へのかかりやすさ、軽い自己負担、医療過誤訴訟が少ないこと、高度・先進的医療技術など、日本の医療の世界的な評価は高いが、患者や国民には医療への不信や不満足感が高く、多くの国民は老後の生活や健康に不安を感じて長生きはしたくないと思っているとの指摘があった。まさにこのギャップを埋められるのが看護であり、多様な国民のヘルスケアニーズに応え、どんな健康状態の人であっても、その人が自立して人間として幸福に、その人らしく暮らしていくことを支える看護の仕事が社会の価値となるようにすることが重要であると述べられた。医療機関だけでなく、地域、職場、

学校、自宅、福祉施設など看護を提供する場は格段に広がっており、また、提供する看護も高度で複雑になってきている。保健、医療、福祉サービスを一体化し統合したサービスとして提供できる強みを持つ看護は、これからの高齢化社会の人々の安心と健康な暮らしを守るための核となる専門職である、と講演を結ばれた。

### <午後の部>

岡谷氏のご講演の後、岡谷氏と午前の部の柳原氏とともに壇上にお上がり頂き、全体討議が活発に行なわれた。(写真6、7)



全体討議：壇上の講師 (写真6)



全体討議：会場 (写真7)